

日本の幼児期自閉スペクトラム症及び知的障害児の母親における育児幸福感と関連要因に関する予備的検討

林 知奈美 筑波大学大学院人間総合科学研究科
小島 道生 筑波大学人間系

要 旨：本研究は、幼児期の自閉スペクトラム症(以下、ASD)児と知的障害児を育てる母親を対象に、育児幸福感とその関連要因について明らかにするものである。ASD 児 20 名と知的障害児 15 名を対象とした検討の結果、ASD 児と知的障害児の母親の育児幸福感に違いはなかった。また、そのため、両群をまとめてソーシャル・サポートや就業形態などとの関係について検討した。その結果、「子どもとの絆」について就業していない母親の方が就業している母親よりも強く認識していることが明らかとなり、障害のない子どもを育てる母親とは異なる傾向であることが示唆された。さらに、育児幸福感とソーシャル・サポートとの関係について検討したところ、悩みを聞いてくれるなどの情緒的サポートへの満足度が育児幸福感の高さに影響すると推察された。そして、ASD 児の母親が幸福感を抱く育児場面としては子どもの笑顔や生活の様子、子どもと他者の関わりを見ることなどが挙げられた。

Key Words： 育児幸福感， ソーシャル・サポート， 自閉スペクトラム症， 知的障害

I. はじめに

育児幸福感とは、母親が育児することによって感じる安心、希望、喜び、感謝、同情、誇りなどの感情を総称した幸せな気持ちであり¹⁴⁾、「育児の喜び」、「子どもとの絆」、「夫への感謝の念」の3因子で構成される。育児幸福感の関連要因については、清水・関水・遠藤・落合¹⁶⁾が、フルタイムで働く母親においては、母親自身または末子の年齢を重ねることによりいくつかの因子で育児幸福感が高まる傾向がみられ、専業主婦やパートタイムの母親では、いくつかの因子で育児幸福感が低くなる傾向がみられたことを報告している。このように、日本においては就業していない母親が抱く育児への束縛感や負担感といった否定的感情が、フルタイム・パートタイムで就業している母親に比べて有意に高いとする研究が複数みられる⁹⁾¹⁰⁾²²⁾。しかし、障害児者を育てる母親においてフルタイム就労者の割合が少ないこと³⁾、就労を継続することや再就職が難しいことは欧米の研究ですでに明らかにされている⁴⁾。清水ら¹⁶⁾の

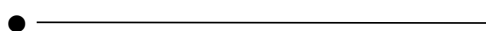
研究により、育児中の母親の情動と就労の状況が関連することが示されており、障害を有する子どもの母親においても育児幸福感が就業状況と関連することが予想される。また、障害を有する子どもを育てる母親は一般の女性に比べて就業率が低い³⁾⁴⁾¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾ことから、一般の同年代女性に比べて育児幸福感が低い傾向がみられる可能性が高いと推察される。

ところで、我が国における障害児を育てる母親に関する研究は、母子関係のあり方や⁵⁾、子どもの障害に対する母親の受容過程、育児負担感情などに重点をおく研究が多く行われる傾向が近年も続いている³⁾。その背景としては、障害児を育てる母親が定型発達児を育てる母親に比べて育児ストレスが高い¹⁷⁾といわれていることが考えられる。特に ASD 児・者と暮らす家族は、その他の障害児・者の家族と比べて高いストレスを有している²³⁾。坂口・別府¹¹⁾は就学前の自閉症児独自の問題として、愛着形成成立の困難さという特徴をもつことも報告している。

近年、障害を有する子どもを育てる母親の心理的側面に関する研究では、ストレスなどのネガティブな側面ではなく、主観的幸福感などが

ジティブな側面を取り上げ、ソーシャル・サポートとの関連を示唆するものがみられる。阿尾¹⁾は、重症心身障害児・者の家族において、ソーシャル・サポートの中でも特に家族のサポート及び近隣者のサポートへの満足度が高いと主観的幸福感も高いことを報告している。また、ASD 児を育てる母親は定型発達児を育てる母親に比べてより多くのサポート源を求めていることが示されている²⁾。しかし、ASD 児を育てる母親の幸福感などのポジティブな側面に関する研究は少なく、またソーシャル・サポートなど必要とする支援についても十分に明らかになっていない。ASD 児を育てる母親の育児支援へとつなげるためには、まずは主観的幸福感や育児幸福感などのポジティブな感情の実態とその影響要因について明らかにしていくことが求められよう。

以上のことから、本研究では、幼児期にある知的障害を併せ有する ASD 児の母親における育児幸福感について、ASD 以外の診断を受け知的障害を併せ有する子どもの母親との比較検討によりその実態を明らかにすることを目的とする。また、母親の就業状況やソーシャル・サポートの満足度等、障害を有する子どもを育てる母親の育児幸福感に関連する要因についても検討する。なお、本研究では対象となった人数が少数であることから、予備的検討として位置付ける。



II. 方法

1. 調査対象者

知的障害を併せ有する 3 歳から 6 歳の ASD 児 26 名と、対照群として ASD 以外の知的障害の子どもを育てる母親 16 名に研究を依頼した。

2. 調査時期

調査時期は 2018 年 7 月上旬～11 月中旬であった。

3. 調査手続き

調査は、特別支援学校、療育機関、親の会、大学での教育相談において、それぞれ代表者の承諾を得て、アンケート調査用紙が配布され実施された。

4. 質問紙の内容

質問紙は、フェイスシート、育児幸福感、ソ

ーシャル・サポート、自由記述 1 項目から構成される。

(1) フェイスシート

対象児の属性、家族構成、母親自身(年齢、現在の就業の有無、就業形態とその形態を選択した理由(就業している場合)、現在の就業希望の有無(就業していない場合)等)について回答してもらった。

(2) 育児幸福感の測定

清水・関水・遠藤¹³⁾の育児幸福感尺度(Childcare Happiness Scale, 以下、CHS)短縮版を使用した。なお、清水ら¹³⁾は定型発達児の母親を対象として調査を行っている。そのため、知的障害を有する子どもの発達に考慮し、第二因子「子どもとの絆」に含まれる「いくら叱っても、お母さん大好きと言ってくると安心する」という項目を「いくら叱っても、お母さん大好きというような意思表示をしてくれると安心する」という表現に変更した。また、清水ら¹³⁾は、第三因子を「夫への感謝」としているが、近年、家族の在り方が多様化していることに配慮し、感謝の対象を夫に限定しない「家族への感謝」へと変更した。回答の際には、「家族」という表現のなかに、夫、子どもの祖父母にあたる人物、パートナー、回答者自身の兄弟姉妹などを含むことを明記した。

以上のように一部改変を行った上で、「育児の喜び」「子どもとの絆」「家族への感謝」の 12 項目を 5 件法にて回答してもらった。そして、「あてはまる」を 5 点、「少しあてはまる」を 4 点、「どちらでもない」を 3 点、「あまりあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点の得点化を行った。

(3) ソーシャル・サポートの測定

阿尾¹⁾のソーシャル・サポート満足度尺度を一部改変し使用した。具体的には、対象者による場面の想定が容易になるよう「利用者様」から「お子様」へ文言の変更を行ったほか、家族の在り方の多様化に配慮し配偶者・きょうだいからのサポートに関する項目を除外した。また、本研究の対象児に想定される利用機関やサポートの選定を行い、所属機関の職員からのサポート、療育機関の職員からのサポートに関する項目の追加、及び医療的ケアに関する項目の除外等を行った。加えて、所属機関の有無や利用サービスの有無における個人差に配慮し、所属または利用がない場合には「所属(利用)していない」を選択できるようにする等の改変を行った。これらの改変により、「近隣者のサポート」、

「行政サービスの質」領域のほか、新たに「所属機関による対応の質」、「療育機関による対応の質」、「利用サービスの質」の3領域を設定した。本研究では、以上の5領域からなる33項目を5件法にて回答してもらった。そして、「満足」を5点、「やや満足」を4点、「どちらでもない」を3点、「やや不満」を2点、「不満」を1点とし、得点化を行った。

(4) 自由記述

「子育てをされていてどんなときに幸福感を抱くのか」について自由記述による回答を求め、分析用フリー・ソフトウェア KH Coder3[®]を用いて共起ネットワークを作成した。なお、共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク^④である。

5. 倫理的配慮

調査の同意については、質問紙の回答及び返送をもって調査に同意したこととした。なお、質問紙は無記名であること、回答したくない質問に関しては無記入で構わないこと、回答を途中で止めても構わないことを明記した。また、調査に協力しないこと、途中でやめることなどによって不利益を被ることがないことも明記した。回答のデータについては、すべて統計的に処理し、個人の回答がそのままの形で公開されることはないことを明記した。さらに、本調査により得られたデータは、本研究のみに使用され、研究を公表する際には個人を特定できるような情報は一切公表しないことも明記した。

III. 結果

1. プロフィール

回収された質問紙は、35部であった(回収率: 83.3%)。全回答数のうち、知的障害を併せ有するASD児の母親による回答は20部、ASD以外の診断を受け知的障害を併せ有する子どもの母親による回答は15部であった。対象児の属性(性別、年齢、所属、療育手帳の有無と程度)、家族構成について(対象児を含めた兄弟姉妹の数、対象児の出生順、兄弟姉妹のうち末子の年齢、祖父母との同居の有無)、母親自身について(年齢、現在の就業の有無、就業形態(就業している場合)、現在の就業希望の有無(就業していない場合))の結果のうち、ASD群と非ASD群についての結果をTable 1に示した。

2. 子どもの障害種による育児幸福感の差異

ASD群と非ASD群における育児幸福感の差異について検討するため、各群における育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差を算出し、分析を行った。その結果をTable 2に示す。

子どもの障害種による母親の育児幸福感の差異について検討するため、因子別の平均得点についてt検定を行った。その結果、第一因子「育児の喜び」、第二因子「子どもとの絆」、第三因子「夫への感謝」の全てにおいて有意差はなかった。以上の結果より、以降の育児幸福感に関する分析では、ASD群と非ASD群を「知的障害を有する子どもの母親」という1群としてまとめて分析を行った。

3. 育児幸福感の関連要因

育児幸福感に関連する要因を検討するため、育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差を算出し、分析を行った。Table 3は、対象児の性別(男・女)、対象児を含めた兄弟姉妹の数(1人または2人・3人以上)、対象児の出生順(長子・第二子以降)、対象児を含む兄弟姉妹のうち末子の年齢(1歳~3歳・4歳~6歳)、母親の年齢(30代・40代)のそれぞれについて、平均得点と標準偏差を示したものである。対象児と母親の属性が育児幸福感に与える影響について検討するため、これらの属性について、因子別にt検定を行った。

その結果、第一因子「育児の喜び」、第二因子「子どもとの絆」、第三因子「家族への感謝」の全てにおいて、対象児の性別、対象児を含めた兄弟姉妹の数、出生順、対象児を含む兄弟姉妹のうち末子の年齢、母親の年齢のいずれによっても有意差はなかった。したがって、これらの対象児と母親の属性は、育児幸福感に影響を与えていない可能性が示唆された。

次に、母親の就業状況(就業している・就業していない)について、育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差を算出した。その結果は、Table 4の通りである。t検定を行った結果、第一因子「育児の喜び」と第三因子「家族への感謝」では、有意差がなかった。しかし、第二因子「子どもとの絆」については、両群の得点の間に1%水準で有意差があり、就業していない方が就業している母親よりも高かった(両側検定: $t(33) = 2.74, p < .01$)。

Table 1 対象児及び母親の属性

		項目	ASD群 (N=20)	非ASD群 (N=15)
対象児	性別	男	16	9
		女	4	6
年齢	3歳	4	2	
	4歳	3	6	
	5歳	11	4	
	6歳	2	3	
所属 (複数回答)	特別支援学校幼稚部	17	7	
	幼稚園	1	3	
	保育園	1	5	
	その他	1	5	
療育手帳の程度	A1、1度	0	1	
	A2、2度	5	0	
	B1、3度	8	5	
	B2、4度	6	5	
	なし	0	4	
	その他	0	0	
兄弟姉妹数 (対象児を含む)	1人	6	3	
	2人	8	8	
	3人	5	4	
	4人	0	0	
	5人	1	0	
対象児の出生順	長子	9	7	
	第二子	8	5	
	第三子	3	3	
	第四子以降	0	0	
末子年齢	0歳	0	0	
	1歳	2	2	
	2歳	2	2	
	3歳	4	3	
	4歳	3	3	
	5歳	7	1	
	6歳	1	2	
祖父母との同居	有	0	1	
	無	20	13	
非ASD群診断名 (複数回答)	ダウン症 (21トリソミー)		9	
	ルビンスユタインテイビー症候群		1	
	ウエスト症候群		1	
	ソトス症候群		1	
	発達遅滞または発達遅延		2	
	軽度知的障害		1	
	知的障害		1	
母親	年齢	19歳以下	0	0
		20代	0	0
		30代	7	6
		40代	13	9
		50代以上	0	0
現在の就業状況	有	6	7	
	無	14	8	
就業形態 (N=6)	フルタイム	2	2	
	パートタイム	2	5	
	自営業	2	0	
	在宅勤務	0	0	
就業希望 (N=14)	はい	5	3	
	いいえ	9	5	

Table 2 ASD 群と非 ASD 群における育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差

		ASD群 (N=20)		非ASD群 (N=15)	
		平均	SD	平均	SD
第一因子	育児の喜び	4.18	1.16	4.27	0.48
第二因子	子どもとの絆	3.99	1.23	3.97	0.76
第三因子	家族への感謝	4.38	1.03	4.47	0.64

Table 3 対象児と母親の属性による育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差

		育児の喜び		子どもとの絆		家族への感謝		N
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	
性別	男	4.18	1.03	3.98	1.18	4.37	0.92	25
	女	4.30	0.61	3.98	0.62	4.53	0.79	10
兄弟姉妹数	1人/2人	4.14	1.02	3.83	1.14	4.35	1.00	25
	3人以上	4.40	0.64	4.35	0.63	4.60	0.44	10
出生順	長子	4.24	1.05	3.97	1.07	4.35	1.11	16
	第二子以降	4.20	0.83	3.99	1.04	4.47	0.65	19
末子年齢	低年齢 (1歳~3歳)	4.47	1.06	4.23	1.12	4.51	1.02	15
	高年齢 (4歳~6歳)	4.11	0.66	3.83	0.95	4.42	0.76	16
母親の年齢	30代	4.37	0.78	4.35	0.73	4.46	0.79	13
	40代	4.13	1.00	3.76	1.15	4.39	0.94	22

Table 4 就業の有無による育児幸福感の因子別平均得点と標準偏差

	育児の喜び		子どもとの絆		家族への感謝		N
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
就業している	3.88	1.05	3.40	1.17	4.31	1.11	13
就業していない	4.42	0.80	4.32	0.80	4.48	0.73	22

**p<.01

Table 5 ASD 群と非 ASD 群におけるソーシャル・サポート満足度の領域別平均得点と標準偏差

	ASD群			非ASD群		
	平均	SD	N	平均	SD	N
近隣者のサポート	3.41	1.02	19	3.59	0.71	12
行政サービスの質	3.12	1.49	19	2.96	0.99	12
所属機関による対応の質	4.53	0.69	19	4.50	0.63	10
療育機関による対応の質	4.12	0.61	15	4.39	0.85	11

Table 6 育児幸福感の因子別平均得点とソーシャル・サポート満足度の領域別平均得点との順位相関係

	育児の喜び	子どもとの絆	家族への感謝	N
近隣者のサポート	.210	.036	.330	31
行政サービスの質	.387*	-.023	.465**	31
所属機関による対応の質	.489**	.107	.634**	29
療育機関による対応の質	-.005	-.141	.259	26

*p<.05, **p<.01

4. 子どもの障害種によるソーシャル・サポート満足度の差異

Table 5 は、ASD 群と非 ASD 群におけるソーシャル・サポート満足度の領域別平均得点と標準偏差を示したものである。なお、「所属機関による対応の質」、「療育機関による対応の質」については、所属または利用をしている場合のみ回答していただくよう質問紙を構成したため、因子により人数が異なっている。「利用サービスの質」については、「利用している」または「利用していない」の選択により非 ASD 群の人数が少なかったため、統計処理は行わず、すべての分析から除外した。

子どもの障害種による母親のソーシャル・サポート満足度の差異について検討するため、領域別平均得点について t 検定を行った。その結果、「近隣者のサポート」、「行政サービスの質」、「所属機関による対応の質」、「療育機関による対応の質」のいずれにおいても有意差はなかった。以上の結果より、以降のソーシャル・サポート満足度に関する分析では、ASD 群と非 ASD 群を「知的障害を有する子どもの母親」という 1 群としてまとめて分析を行った。

5. 育児幸福感とソーシャル・サポート満足度の関連

ソーシャル・サポート満足度が育児幸福感に関連するかについて検討するため、育児幸福感の因子別平均得点とソーシャル・サポート満足度の領域別平均得点について Spearman の順位相関係数を算出した。その結果は、Table 6 の通りである。

育児幸福感の第一因子「育児の喜び」において、「行政サービスの質」との間には 5%水準で有意な相関がみられた($r = .387, p < .05$)。また、「所属機関による対応の質」との間には 1%水準で有意な相関がみられた($r = .489, p < .01$)。

「近隣者のサポート」、「療育機関による対応の質」との間には有意な相関はみられなかった。

育児幸福感の第二因子「子どもとの絆」において、ソーシャル・サポート満足度の全ての領域との間で有意な相関はみられなかった。

育児幸福感の第三因子「家族への感謝」において、「行政サービスの質」との間には 1%水準で有意な相関がみられた($r = .465, p < .01$)。また、「所属機関による対応の質」との間にも 1%水準で有意な相関がみられた($r = .634, p < .01$)。

「近隣者のサポート」、「療育機関による対応の質」との間には有意な相関はみられなかった。

6. 幸福感を抱く育児場面

「子育てをしていてどんなときに幸福感を抱くのか」について、分析対象となった記述の総抽出文と総単語数は、ASD 群において 40 文 748 語、非 ASD 群において 39 文 695 語であった。なお、ASD 群においては「きょうだい」が「きょう」と「だい」に分かれて抽出されたため、「きょうだい」という 1 語で抽出されるよう強制抽出の設定を行った。さらに、各群で出現回数の多い単語を抽出し共起ネットワークを作成した結果を Fig.1, Fig.2 に示した。なお、実線のつながりのなかでも特に太い実線は共起の程度が強かったことを示している。

ASD 群においては、「子供(子ども)」や「見る」の出現数が多く、「笑顔」、「成長」、「感じる」、「きょうだい」等も複数出現していた。また、「子供(子ども)」と「見る」、「成長」と「感じる」、「姿」と「寝顔」、「きょうだい」と「仲良く」、「親」と「大変」「人」「場面」、「幸せ」と「障害」「多い」「思う」、「安心」と「考える」の間に太い実線がみられた。「子供(子ども)」、「見る」の 2 語と「笑顔」はネットワークを作っており、子どもの笑顔を見ることに関する回答が多くみられた。「寝顔」と「姿」も独自にネットワークを作っており、寝る、食べる等の子どもの姿を見ることに関する記述もみられた。また、「成長」と「感じる」の 2 語もネットワークを作っており、『子供(子ども)の成長を感じたとき』という記述が多くみられた。そのほか多かった「きょうだい」、「遊ぶ」、「仲良く」は 3 語でネットワークを作っており、『きょうだいと仲良くしている、遊んでいるとき』や『きょうだいとの関わりを見たとき』等の記述がみられた。「親」、「場面」、「人」が作るネットワークにおいては、『親以外の人からの働きかけに応える、関わりを持つようとする姿を見る』ことや『相手の表情、場面を見て共感できているとき』といった記述が複数みられた。「幸せ」と「障害」は互いに太い実線で結ばれており、『障害のあるなしは関係ないと思える』や、『子育てに幸せを感じられるのは障害の軽さが理由では』といった記述がみられた。

非 ASD 群においては、「笑顔」や「大変」、「食べる」、「ご飯」の出現数が多く、「感じる」、「思う」、「幸福」、「笑う」、「元気」等も複数出現していた。また、「一緒」と「感じる」、「大変」と「見る」、「ご飯」と「時間」、「幸福」と「抱く」の間に太い実線がみられた。「笑顔」は「毎日」とネットワークを作っていた。また、別な

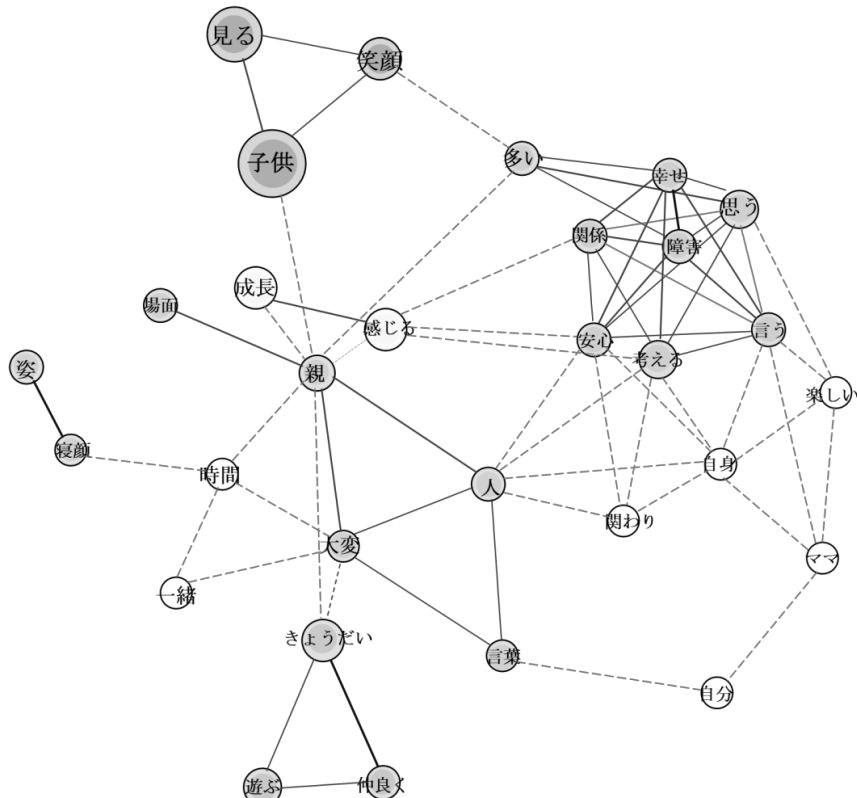


Fig.1 子育てをしていて幸福感を抱く場面 (ASD 群)

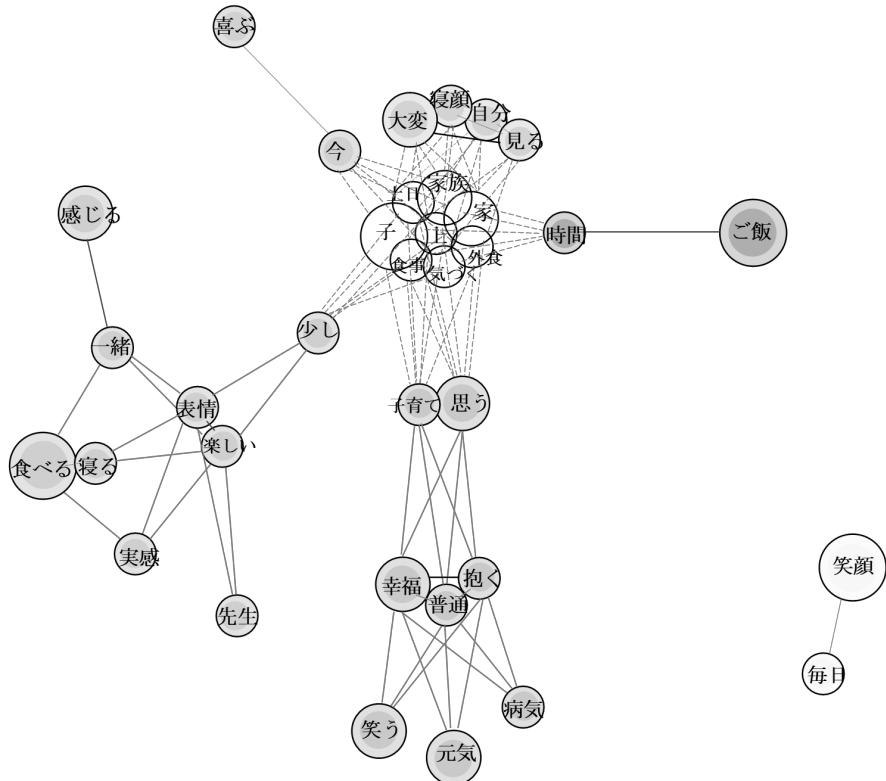


Fig.2 子育てをしていて幸福感を抱く場面 (非 ASD 群)

ネットワークに存在している「笑う」についても、『子どもが笑ってくれているとき』など子どもの笑顔に関する記述がみられたほか、同じネットワーク上に存在する「元気」と併せて『子どもが笑って元気でいてくれるとき』という記述もみられた。「病氣」を含む記述としては、『病氣であった時期がある分、元気に過ごしていることには普通以上に幸福感を抱いていると思う』といった記述が複数みられた。そのほか多くみられた「ご飯」については、『みんなでご飯を食べたり、お風呂に入ったり、当たり前のことを行っているとき』、別のネットワークに存在している「食べる」や「寝る」については『毎日ご飯をたくさん食べてくれる』、『穏やかな表情で寝ているとき』等が挙げられていた。また、「楽しい」「表情」については、『子どもが楽しそうに生き生きとした表情をしているとき』や『きょうだいどうして楽しさをともに感じているとき』といった記述がみられた。「喜ぶ」については、『祖父母が子どもの成長を喜んでくれたとき』等、家族や子ども自身の喜ぶ様子が回答者の幸福感に繋がっている記述がみられた。また、「喜ぶ」は「今」とネットワークを作っており、「今までできなかったことができるようになったとき」のような、子どもの成長に対する嬉しさも記述されていた。

IV. 考察

本研究により、3歳から6歳の知的障害を併せ有するASD児を育てる母親の育児幸福感と、ASD以外の診断を受け知的障害を併せ有しているか、または、知的障害のみを有する子どもを育てる母親の育児幸福感の間には、顕著な違いはないことが示された。柳澤²³⁾は、特にASD児・者と暮らす家族は、その他の障害児・者の家族と比べて高いストレスを有していることを報告しているが、本研究における結果は、ストレスと育児幸福感は互いに直接的に影響しあうものではない可能性を示唆するものとなった。このことに関連し、定型発達児を育てる母親を対象とした先行研究では、清水・関水・遠藤・落合¹⁴⁾によって育児ストレスは直接的には育児幸福感に影響しないと考えられるとの報告がなされているが、障害を有する子どもを育てる母親の育児幸福感については、育児幸福感を構成する要素に関する具体的調査も含めたより詳細な検討が必要であるといえよう。

対象児と母親の属性と育児幸福感の関連については、対象児の性別、対象児を含めた兄弟姉妹の数、出生順、対象児を含む兄弟姉妹のうち末子の年齢、母親の年齢のいずれも有意差はなかった。清水ら¹⁶⁾は、CHSと末子年齢及び母親の年齢の関連について勤務形態別に検討し、母親や末子の年齢が上がるにつれ、母親の心のゆとりが生まれ幸福感が高まる因子と、負の影響を受ける因子があることを明らかにしている。しかし、本研究においては、調査対象者が少なく勤務形態別に育児幸福感と末子年齢の関連について検討することはできなかった。

母親の就業の有無については、第二因子「子どもとの絆」において、就業していない群の平均得点が就業している群の平均得点に比べて有意に高かった。また、第一因子「育児の喜び」、第三因子「家族への感謝」についても、有意差はなかったものの、就業している群に比べて就業していない群の平均得点がやや高い傾向にあり、知的障害を有する子どもを育てる母親における育児幸福感と就業状況には関連があることが示唆された。先行研究においては、清水ら¹⁶⁾が、子育て中にフルタイム従事する母親における母親本人や子どもの成長と育児幸福感とのポジティブな関係を示唆している。また、就業していない母親が抱く育児へ否定的感情が、就業している母親に比べ有意に高いとする研究も複数みられる⁹⁾¹⁰⁾²²⁾。しかし、本研究における結果は、これらの先行研究の結果とは異なり、就業していない母親の方が「子どもとの絆」を強く感じる結果となった。この原因については本研究結果からは明らかにできないが、知的障害を有する子どもを育てる母親と障害のない子どもを育てる母親において、就業の有無が育児幸福感に与える影響は異なっていると考えられる。

母親及び対象児の属性と育児幸福感の関連については、今後、地域性にも考慮しながら対象者を増やしたうえで検討を重ねていく必要がある。

育児幸福感とソーシャル・サポート満足度の領域別平均得点の関連については、ソーシャル・サポート満足度の「行政サービスの質」領域、「所属機関による対応の質」領域の得点が高いと育児幸福感の第一因子「育児の喜び」と第三因子「家族への感謝」の得点が高くなることが示唆された。したがって、ソーシャル・サポートのなかでも、「行政サービスの質」と「所属機関の対応の質」は知的障害を有する子どもを

育てる母親の育児幸福感に関連する要因の1つであると考えられる。香川・西田・徳脇・長嶺・赤沢・難波・松本⁷⁾は、通園事業、通園施設を利用する乳幼児の母親が、「療育・訓練などを行う施設の職員」と「自分の両親」について、養護学校に通う児童の母親が、「学校の職員」と「夫」について、とても役に立つと回答したことを報告した。本研究では特別支援学校幼稚部に所属している子どもの母親も含まれていたことから、香川ら⁷⁾による児童の母親についての報告のとおり、「所属機関による対応の質」への満足度が影響していたと推察される。

自由記述において出現数の多かった語とそれらが形成する共起ネットワークより、本研究のASD群においては、育児場面のなかでも子どもの笑顔や生活の様子、子どもの成長の実感や家族との共有が幸福感をもたらしていることが示唆された。また、子どもたちが仲良くしたり関わりを持ったりしている場面や、子どもが何かをできたときについても幸福感をもたらす場面の1つであると推察される。

坂口ら¹¹⁾は、自閉症児独自の課題を考えたときに重要な側面の1つとして、就学前の自閉症児は愛着形成成立の困難さという特徴をもつことがあると述べている。また、ASDは主徴候として社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応の障害や行動、興味、活動の限局された反復的な様式のある障害である²⁾。本研究におけるASD群についての結果は、子ども同士の関わりや、子どもと他者の関わり、子どもから回答者自身への関わり等の場面において幸福感を抱いていることから、ASDの特徴に関連するものであることが推測される。

非ASD群においても、ASD群と同様に、子どもの笑顔や元気な様子、楽しそうな様子、きょうだいとの関わりを見ること、日常生活のなかの食事や睡眠、入浴の場面での子どもの様子、一緒に何かをすることに幸福感を抱いていることが推察される。

本研究においては、幸福感を抱く育児場面と子どもの有する障害との関連が示唆された。その一方で、清水・伊勢¹²⁾により分類された定型発達児の母親が育児幸福感を感じる際の事情14項目には、「子どもの成長・発達・健康」や「子どものしぐさ」等が含まれており、本研究で得られた記述は必ずしも障害を有する子どもの母親特有のものではなく、育児をする母親が共通して感じるものであることが推測される。

文 献

- 1)阿尾有朋(2014)：重症心身障害児(者)の家族における主観的幸福感の構造－ソーシャルサポート満足度との関連性についての検討－. 特殊教育学研究, 52(3), 181－190.
- 2)傳田健三(2017)：自閉スペクトラム症(ASD)の特性理解. 心身医学, 57(1), 19－26.
- 3)江尻桂子(2014)：障害児の母親における就労の現状と課題－国内外の研究動向と展望－. 特殊教育学研究, 51(5), 431－440.
- 4)江尻桂子・松澤明美(2013)：障害児を育てる家族における母親の就労の制約と経済的困難－障害児の母親を対象とした質問紙調査より－. 茨城キリスト教大学紀要Ⅱ, 社会・自然科学, 47, 153－160.
- 5)藤原里佐(2002)：障害児の母親役割に関する再考の視点－母親のもつ葛藤の構造－. 社会福祉学, 43(1), 146－154.
- 6)樋口耕一(2014)：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 7)香川スミ子・西田真由子・徳脇朋子・長嶺直子・赤沢桂子・難波朱里・松本佳(2004)：障害児を持つ母親の精神的健康度(I)－乳幼児期と学齢期の比較－. 総合福祉, 1, 33－44.
- 8)KH Coder 3. <https://khcoder.net/> (2020.10.6 取得).
- 9)小坂千秋・柏木恵子(2007)：育児期女性の就労継続・退職を規定する要因. 発達心理学研究, 18(1), 45－54.
- 10)中島由紀子・羽田野花美・末永芳子(2016)：育児期の母親の幸福感および育児感情と就業状況との関連. 保健科学研究誌, 13, 61－67.
- 11)坂口美幸・別府哲(2007)：就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造. 特殊教育学研究, 45(3), 127－136.
- 12)清水嘉子・伊勢カンナ(2006)：母親の育児幸福感と育児事情の実態. 母性衛生, 47(2), 344－351.
- 13)清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子(2010)：母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発. 日本助産学会誌, 24(2), 261－270.
- 14)清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・廣瀬昭夫・宮澤美知留・赤羽洋子・松原美和(2009)：母親の育児幸福感を高めるプログラムの実施と評価. 日本看護科学会誌, 29(1), 41－50.
- 15)清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・落合富美江(2007)：母親の育児幸福感－尺度の開発と妥当性の検討. 日本看護科学会誌, 27(2), 15－24.

- 16)清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・落合富美江(2010):育児中の母親の幸福感―就労別にみた母親の年齢,子ども数,末子年齢による幸福感への影響―.母性衛生,51(2),367-375.
- 17)田中正博(1996):障害児を育てる母親のストレスと家族機能.特殊教育学研究,34(3),23-32.
- 18)田中智子(2010):知的障害者のいる家族の貧困とその構造的把握.障害者問題研究,37,21-32.
- 19)上村浩子・高橋利子・日高洋子・原田放子(1999):障害児を持つ母親の子育てと就労に関する意識調査.横浜女子短期大学紀要,14,85-97.
- 20)上村浩子・高橋利子・日高洋子・原田放子(2000):障害児を持つ母親の子育てと就労に関する意識調査その二.横浜女子短期大学紀要,15,41-52.
- 21)山田陽子(2010):療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究.川崎医療福祉学会誌,20,165-178.
- 22)山下久美・庄司順一・首藤敏元(2004):乳幼児の母親の持つ育児負担感とその支援について(I)―都市部の専業主婦の育児負担感に注目して―.埼玉大学紀要 教育学部(教育科学),53(1)59-75.
- 23)柳澤亜希子(2012):自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性.特殊教育学研究,50(4),403-411.

(受稿 2020.6.3, 受理 2020.10.22)